2024年2月11日

説教題「求道者ニコデモ」ヨハネ福音書３章１～17節

主任牧師　加藤　誠

「イエスは答えて言われた。『はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。』」（ヨハネによる福音書3章3節）

ある夜、ニコデモというユダヤ教教師が主イエスを訪ねます。ユダヤの最高議会議員という地位の高い教師がなぜ主イエスのもとに来たのでしょうか。直前の２章で主イエスが「エルサレム神殿で大暴れ」したことは彼の耳に入っていたはずです。ユダヤ教指導者たちにとって衝撃的かつ忌々しき事件でした。「ガリラヤのイエスはいったい何者か？」と眉をひそめて話し合ったことでしょう。その中で一人でイエスを訪ねることは、相当な勇気を要する行動だったはずです。また７章ではイエスのことを「預言者だ」「メシアだ」と褒め称える民衆に業を煮やした指導者たちが「律法を知らない愚かな民よ！」と憤りをあらわにすると、ニコデモは「我々の律法では本人から事情を聴き、確かめるべきではないか」と意見します。すると「お前もガリラヤ出身なのか。良く調べてみよ。ガリラヤから預言者はでないのだ！」と非難を浴びせられています。ここに見えてくるのは、教師や議員たちの中で「一人異色なニコデモ」です。彼は「先輩たちがこう解釈し、皆がこう言っている」という雰囲気を忖度し、呑み込まれることなく、自分で感じ、考えることを大切にした教師だったのです。

また、多くの指導者たちは「イエスがガリラヤ出身であること」を問題視しました。イスラエルは南部にユダヤ、その北隣にサマリア、一番北がガリラヤです。ユダヤにとってサマリアは「唾棄すべき場所」で「決して足を踏み入れたいと思わない場所」でしたが、さらにその北のガリラヤは「存在意味のない場所」でした。ガリラヤはイスラエル十二部族のナフタリ族の領土で、彼らは十二部族の中でも一番下の序列だったため、土地の割り当てでは一番最後にくじを引いています。そして十二部族の中で一番最初に外国の侵略を受けて異邦人が多く住み始めたので、ユダヤの中心エルサレムから見ると「見捨てられた、ケガレタ場所」であり、「そんなガリラヤから預言者やメシアが出るわけがない！」と人々は考えていたのです。が、その中で一人ニコデモは、イエスの言葉と行動を見て「断罪できない、無視できないもの」を感じたのでしょう。そして、直接イエスに会って自分の目で確かめたいと訪ねてきたのでした。ここに、神の前に一人、真摯に御心を求める「求道者ニコデモ」の姿が見えてきます。

さて、訪ねてきたニコデモがまず礼を尽くしてイエスを褒め称える挨拶をしますと、主イエスはその挨拶をスルーして「人は新たに生まれ、水と霊から生まれない限り、神の国を見ることも、入ることも出来ない」と「信仰の根幹にかかわる話」を問いかけます。ニコデモが「年を取った者がどうやって新しく生まれることができるのか」

と戸惑い反論すると、主イエスは「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか！」と厳しい一喝。ニコデモが「新しく生まれ変わるなんて無理だ」と肉の話をしたのに対して、主イエスは「肉の話ではなく、霊の話をしているのだ。それがあなたにわからないのか？」と厳しく言われたのでした。

私たちは「肉の目に見えるもの」で神の働きをとらえようとしますが、神の国（神の愛）の働きは「あそこにある」「ここにある」とは言えないものです。しかし「風」が目に見えなくても「働いている」ように、「神の愛の働き」も肉の目には見えなくても「確かに働いている」のです。私たちも肉の目でイエスを見て判断するのではなく、霊の目でイエスを見ないとその本質が分からない。「肉の目に映るイエス」はガリラヤ出身で最後は十字架で無残にも処刑された人物です。肉の目でしか見れない人たちは「こんな男が神から遣わされたメシアであるわけがない」と決めつけました。しかし霊の目で見る時、この方こそ神のもとから遣わされ、十字架において神のもとに挙げられたメシアであること。神の命の言を語り、神の愛をあらわし、私たちを永遠の命に導いてくださる方であることが見えてくるのです。

この方と共に歩む時、私たちは「どこからきて、どこに行くのか分からない、空しい歩み」ではなく「神のもとからきて神に向かって歩み」に導かれます。朽ちる食べ物のために働く「空しい歩み」ではなく、いつまでもなくならない永遠の命のために働く「喜びを味わう歩み」を知る者とされる。「神の国を見る」「神の国に入る」とは、死後の出来事ではなく、今この世界の現実に「神の愛の支配」を見い出し、味わい、喜び生きる…という、一人ひとりの人生に起こりうる出来事のことなのです。

今朝の場面で「こんなことも分からないのか！」と主イエスに一喝されたニコデモは一人どんな思いで夜道を帰ったのでしょう。教師のプライドを深く傷つけられ「来るんじゃなかった！」と腹を立てて帰ったでしょうか。しかし先ほどの 7 章で、指導者の中でたった一人「本人に話を聴くべきではないか」と語ったニコデモ、さらに主イエスが十字架で処刑された後、アリマタヤのヨセフと共にイエスの遺体を引き取り、100 リトラ（約 32 キロ！）もの没薬と沈香をもって丁寧に墓に葬ったニコデモの姿を見る時、ニコデモは 3 章でイエスを見限ってしまうことなく、その後も「この方はどういう方なのだろう？」と主イエスに目を注ぎ、フォローし続けたことが分かります。そして十字架の死を死なれた主イエスの姿に胸を打たれた「求道者ニコデモ」は「この方こそほんとうに神が遣わされたメシアである」という告白をもってイエスの葬りという大切な役割を担ったのでした。それはペトロたちとは違う形での、ユダヤ人教師ニコデモなりの精一杯の信仰表明だったのではないでしょうか。私たちも「みんな」という言葉に呑み込まれることなく、「霊と水において新しく生まれさせてください」と祈りながら「わたしなり」の仕方で主イエスに従う求道を続けていきたいのです。